

看護基礎教育で必要とされるクリティカルケア看護の 教育内容を探求するための基礎的研究

北 島 泰 子 岸 本 智 砂 子 川 村 未 樹

Basic research on exploring the educational content of critical care nursing needed in basic nursing education.

Yasuko KITAJIMA, Chisako KISHIMOTO, Miki KAWAMURA

Tokyo Ariake University of Medical & Health Sciences Department of Nursing

Abstract : Critical care nursing is a nursing domain that developed in the United States. In Japan, it has become a well-established nursing domain, as evidenced by the establishment of Japan Academy of Critical Care Nursing in Japan. However, the definition of critical care nursing in Japan remains unclear. Under these circumstances, critical care nursing has been introduced into undergraduate nursing education, and the educational content is still in a state of exploration as to what and how it should be taught. Therefore, the purpose of this study is to investigate the impact of practicum on critical care nursing on undergraduate students studying at nursing university. A questionnaire survey was administered to nine students participating in practicum at an emergency center, emergency room, and emergency ward of a tertiary emergency medical facility before and after participation in the practicum, and the results were compared. All responses to the questionnaire were free text, and we attempted to analyze the responses using text mining. The students' knowledge of what critical care nursing is, what critical care nursing aims to achieve, and the target of critical care nursing changed before and after participating in the practical training. It became clear that participation in the practicum, not just lectures, deepened the learning process. The results of this survey can be used as one of the materials for considering how to introduce critical care nursing into undergraduate education and its educational content in the future.

Keywords : Critical care nursing, Undergraduate nursing education, Practicum, Text mining

抄録 : 【背景】 クリティカルケア看護は米国で発展した看護学領域であり、わが国でもクリティカルケア看護学会が設立されるなど、定着した一つの看護領域となっている。しかしながら日本におけるクリティカルケア看護の定義には定まったものがない状態が続いている。そのような中で看護の学部教育にもクリティカルケア看護が導入されているため、何をどのように教えるのか、教育内容も手探りの状態である。

【目的】 本研究はクリティカルケア看護に関する臨地実習に参加する前後の学生の知識を把握することを目的とする。

【方法】 クリティカルケア看護の範囲とされる三次救急指定医療機関の救命救急センター、救急外来、救急専用病棟での臨地実習に参加する学生9名に対し、実習の参加前後で同一内容のアンケート調査を実施し比較する。アンケートへの回答はすべて自由記述とし、テキストマイニングを用いて回答の分析を試みた。

【結果】 クリティカルケア看護とは何か、クリティカルケア看護が目指すもの、クリティカルケア看護の対象について等、実習へ参加する前後で学生の知識に変化が見られた。

【考察】 座学で学んだ知識に加え実習に参加することは学生の知識をより深めることに繋がること明らかになった。本調査の結果は、今後のクリティカルケア看護の学部教育への導入の仕方や教育内容を検討する際の一つの基礎資料となりうると考えられる。

キーワード：クリティカルケア看護，看護学部教育，臨地実習，テキストマイニング

I. 緒 言

クリティカルケア看護は、米国で発展した看護学領域であり、1969年にアメリカクリティカルケア看護師協会 (American Association of Critical-Care Nurses : AACN)¹⁾が発足している。わが国では1990年代からクリティカルケア看護という言葉が使われるようになった。1998年には一般社団法人日本看護系大学協議会が高度実践看護師教育課程認定規定を制定し、その中に特定されている専門看護分野としてクリティカルケア看護 (Critical Care Nursing) が含まれている²⁾。2000年にはクリティカルケア看護領域の専門看護師教育課程が開始された。このような起源をもつクリティカルケア看護ではあるが、そもそもクリティカルケア看護とは何を指すのであろうか。前述のアメリカクリティカルケア看護師協会では、クリティカルケア看護を「実在あるいは潜在する健康問題に対する人々の反応を診断し、治療することであって、クリティカルケアでは特に、生命をおびやかす問題に対して専門的な援助を行うことである」と定義している³⁾。寺町優子氏によれば、米国ではクリティカルケア看護は、患者がemergency roomからICUなどの病棟に移った後で、クリティカルな状態または、そのような状態が予測される患者に行う看護を指すと述べている⁴⁾。

翻って我が国のクリティカルケア看護はどのように定義づけられているのだろうか。井上智子氏は「あらゆる治療・療養の場、あらゆる病期・病態にある人々に生じた、急激な生命の危機状態に対して、専門性の高い看護ケアを提供することで、生命と生活の質 (QOL) の向上を目指す」⁵⁾と定義づけており、また、看護教育に使用されるテキストには、クリティカルケア看護を、「呼吸・循環・代謝などに重大な機能障害をもつ、生命の危機状態にある患者の生命を維持し、その回復を支援すること」などと書かれている⁶⁾。加えてクリティカルケア看護のカバーする範囲は広く、急性期、回復期、慢性期、終末期などのあらゆる場面で患者が生命の危機に晒されることが想定され、対象も小児から高齢者まですべての発達段階で重篤な状態に陥る患者が生じる可能性があるといえる。昨今、看護の基礎教育においてもクリティカルケア看護という言葉を使うことは珍しくなくなったが、我が国におけるクリティカルケア看護の定義は、定義自体がそれぞれに設定されておりコンセンサスを得ていない状態である。そのような中でクリティカルケア看護の範疇とされる講義や演習が学部教育に取り入れられており、したがって学部教育におけるクリティカルケア看護の実習の在り方も手探りの状態であるといわざるを得ない現状が存在する。看護の学部教育におけるクリティカルケア看護では、何を、どのように、どれだけ教育に取り入れることが適切であるのか検討される必要があると考える。現行では、実習に参加する前に座学とし

てクリティカルケア看護とは何を指すのか、クリティカルケア看護の対象、患者の状態、クリティカルケア看護が行われる場所、看護師の役割、多職種協働の医療と看護等の講義が行われている。その後、クリティカルケア看護の実習に参加することによって、クリティカルケア看護とは何かを実践を通じて理解してもらうことを現在学部教育の目標としている。具体的には、クリティカルケア看護では慢性疾患患者や回復期リハビリテーション中の患者など、どの病期にある患者でも対象になりうる。全ての年齢 (発達段階) の患者が対象となること、医療施設以外の場所でも行われること、患者だけでなく患者の家族や重要他者も看護の対象となること、身体的な看護のみならず精神的な看護が重要であること等を学生が学び理解することである。本来ならば、座学と実習は一連のクリティカルケア看護の学部教育であり、どちらにおいても学生は同じ目標を達成できるようになっているはずである。しかし、それぞれを履修したあとの学生の知識がどの程度であるか、今まで検証されてこなかった。そこで本研究では、クリティカルケア看護に関する実習を経験する前後で学生はクリティカルケア看護をどのように理解し捉えているのか、学生の知識の程度を把握することを目的とする。

本研究では、首都圏に所在する看護系大学であるA大学の看護学部で実施されている統合実習に着目した。A大学の4年次生対象の必修科目である統合実習とは、学生の意思で参加する実習の領域を選択できる実習である。学生は3年次生のうちに自身で参加したい実習領域を決め選択する。また3年次生までに周手術期看護の実習に参加しており、その際に手術室での実習や、クリティカルケア看護の範疇である集中治療部での実習を済ませている。そのうえで、同領域でさらに専門性の高い実習を希望する学生は、4年次生で三次救急指定の医療機関にある救命救急センターや、ドクターヘリを運用している医療施設の実習に参加することになる。一方でA大学の学部教育には「クリティカルケア看護」という名称で開講されている科目や授業はない。他の関連する授業の中でクリティカルケア看護とはどのような看護の範囲を言うのか、米国の定義や日本でいわれている「クリティカルケア看護とは」という題材は扱っている。しかしながら、座学だけで、しかも概念的なことだけを説明されても学生はクリティカルケア看護について具体的にどのような内容を指すのか、看護のどの範囲をいうのか、漠然とした知識しか持ち合わせていないと考えられる。統合実習では3年次生までに経験がないクリティカルケア看護の範囲を広げた実習が行われるが、実習に参加する前の学生は、おそらく何を学ぶことがクリティカルケア看護を学ぶことになるのか、具体的には理解できていないのではないかと考えられる。

本研究では、A大学の統合実習に参加する前の学生た

ちにクリティカルケア看護に対する意識や知識を調査し、その後、実習でクリティカルケア看護を実践した上で再度意識や知識を調査する。このことから実習に参加する前後の学生の知識の程度を把握し、今後のクリティカルケア看護の学部教育への導入の仕方や教育内容を検討する際の一つの基礎資料としたい。

II. 研究方法

1. 調査概要

クリティカルケア看護の範疇である、生命の危機状態にある患者の看護を実践する場として、救命救急センター・救急外来・救急専用病棟での実習に参加する看護系大学の学生を対象とし、実習に参加する前後で同一のアンケート調査を実施する。アンケート調査では、クリティカルケア看護に対して抱くイメージや知識、看護の対象、専門職が行っている仕事内容等を質問する。アンケートによって収集されたデータをテキストマイニングの手法により分析し、実習に参加した前後で比較する。テキストマイニングの分析方法を採用することで、語の出現傾向を探ることができ、またこれらを実習に参加した前後で比較することで実習前後の学生の知識を把握することができる。

2. 調査対象

首都圏に所在する看護系大学であるA大学の看護学部所属する4年次生の学生で、かつ選択必修科目である統合実習において成人看護学急性期領域を選択した学生9名を調査対象とした。A大学の統合実習、成人看護学急性期領域の実習内容は、周手術期看護などを含む広義の急性期の実習ではなく、救命救急センター・救急外来・救急専用病棟で行われるクリティカルケア看護に範囲を狭めたものである。これは4年次生の前学期に選択必修とされている実習科目である。2単位60時間のうち、1単位30時間は学生自ら希望し選択した領域の実習に参加することになっている。選択肢には、成人看護学急性期、成人看護学慢性期・終末期、精神看護学、老年看護学、母性看護学、小児看護学、地域看護学の7領域があり、いずれの領域も3年次生までに行った看護学実習より更に専門性の高い実習内容が組み込まれている。各領域の参加学生の定員は9名である。よって本調査の対象は成人看護学急性期領域を選択した学生9名とした。

3. 調査手続き

調査対象の学生が選択している実習は2022年5月16日～5月27日のうち土日を除く10日間で行われた。実習内容の一部にDMAT隊員からの講義、フライトナースからの講義があり、救急看護、災害看護、フライトナース・DMAT隊員による病院外活動（プレホスピタルケア）な

どが理解できるようになっていた。また臨地実習として、三次救急指定の医療機関の救命救急センター・救急外来・救急専用病棟での3日間の実習、ドクターヘリ常駐施設での1日実習（2022年度はCOVID-19の感染拡大のため中止）があった。実習施設では、患者に対しバイタルサインの測定や観察、患者の移送、その他の学生が患者に提供できるケアはできる限り実施した。また実習参加前には実習に関係する事前学習課題が課せられていた。具体的な内容は表1のとおりである。

以上の事前学習課題や実習内容に一切触れないうちに研究への参加を承諾した学生に第1回目の「実習前」アンケート調査を2022年4月27日～4月29日の間で行った。実習後に第2回目のアンケートが予定されていることは事前に伝えなかった。第1回目のアンケートを実施する前には、学生に対して「クリティカルケア看護」という表現を一切使用せず、また成人看護学急性期領域の実習内容を伝える際も実習施設名や救命救急センター・救急外来・救急専用病棟という表現のみを使用し、実習内容がクリティカルケア看護であることは伝えなかった。その後、前述の事前学習課題の提出、実習への参加を果たした学生で、研究への参加を承諾した学生に第2回目の「実習後」アンケート調査を2022年5月27日～5月31日の間で行った。

アンケート調査は「実習前」「実習後」共にウェブサイト上で行った（GoogleFormsを使用）。質問内容は表2のとおりであり、回答は全ての項目で自由記述とした。質問内容を作成するにあたり、関連する先行研究やクリティカルケア看護のテキスト等で述べられている「クリティカルケア看護とは」に共通して用いられている言葉

表1 実習参加前に課せられた学習課題

- 一次救急とは
- 二次救急とは
- 三次救急とは
- DMATとは
- ドクターカーとは
- ドクターヘリとは
- フライトナースとは
- 救急救命士とは
- プレホスピタルケアとは
- ACLSとは
- トリアージとは
- 院内トリアージJTAS（緊急度判定支援システム）とは
- DNRとは
- 意識状態の観察の仕方（GCS、JCSとは）
- 気道確保にはどのような方法があるか
- AEDまたは除細動とは
- ログロールとは

表2 質問内容

質問	質問内容
1	統合実習で「成人看護学急性期領域」を希望された理由をお聞かせください。
2	クリティカルケア看護とはどんな看護を言うと思いますか？イメージで良いので思い浮かぶだけ書いてみてください。
3	クリティカルケア看護が対象にしている患者さんの範囲（慢性期，周手術期，小児科，がん患者，救急看護など）に入ると思うものをどのような表現でも良いので思い浮かぶだけ書いてみてください。
4	クリティカルケア看護が行われる場所はどこだと思いますか？イメージで良いので思い浮かぶだけ書いてみてください。
5	クリティカルケア看護が目指しているものは何だと思いますか？イメージで良いのでお書きください。
6	DMAT隊員とはどんな仕事をする看護師だと思いますか？イメージで良いのでお書きください。
7	フライトナースとはどんな仕事をする看護師だと思いますか？イメージで良いのでお書きください。
8	夢で良いので，将来看護師としてどこで働きたいですか？（ICU，CCU，フライトナースなど具体的に）

である，あらゆる治療・療養の場，あらゆる病期・病態，生命の危機状態，回復の支援，等をどのように捉えているかを問う質問内容を選択した。

4. 分析の方法

アンケート調査で得られた自由記述の内容に対し，KH Coder3 (3, Beta, 04f) を用いて共起ネットワークを使った分析を行った。これは出現パターンが互いに似ている語，共起の程度が強い語と語を線で結んだ図として表現してくれるソフトである。生データのままだけ抽出語リストを作成し，形態素が適切ではない抽出語があった場合には，分析に使用する語の取捨選択をするために，強制抽出する語の指定を行った。語と語のネットワーク図には，サブグラフ検出 (modularity) を選択した。この方法を採用することにより，対象者が自由に記述した内容から語を選択する際に手作業によって恣意的に選択されるのを防ぐことができる。

5. 倫理的配慮

データの収集に先立ち，本研究は東京有明医療大学倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号341）。また利益相反の関係にある企業・組織および団体等はない。

Ⅲ. 結果

1. 質問1の共起ネットワークの前後比較

質問1は，「統合実習で『成人看護学急性期領域』を希望された理由を再度お聞かせください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図1，参加後が図2である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「領

域」の7回であり，続いて「実習」の6回，「楽しい」「興味」の5回，「急性」の4回，「看護」の3回，「外科」「患者」「救命救急」「手術」等が2回であった。「救命救急」「患者」「看護」で構成されたサブグラフ，「急性」「興味」で構成されたサブグラフ，「思う」「外科」「楽しい」「領域」「実習」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では，「外科」「興味」が最も多く6回，「看護」4回，「急性」「救急」「病棟」「実習」等が3回，「手術」「領域」などが2回であった。「救急」「興味」で構成されたサブグラフ，「楽しい」「実習」「領域」「急性」「看護」で構成されたサブグラフ，「救急」「興味」で構成されたサブグラフが存在している。

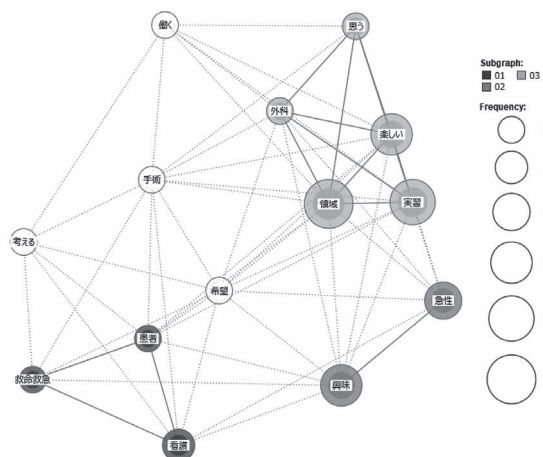


図1 質問1 実習参加前の共起ネットワーク

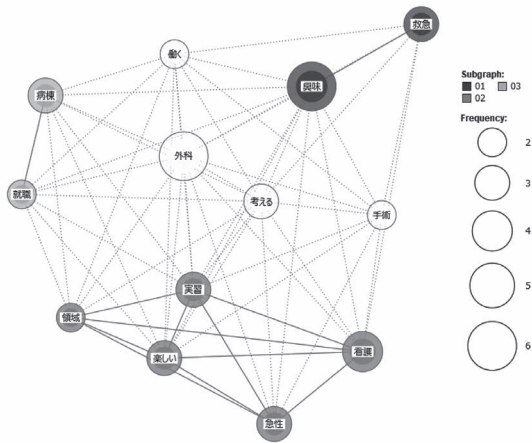


図2 質問1 実習参加後の共起ネットワーク

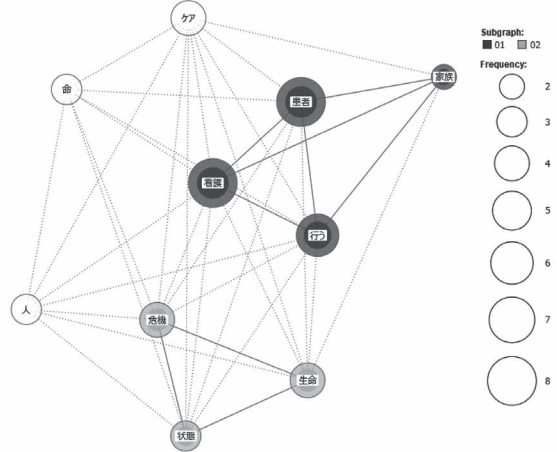


図4 質問2 実習参加後の共起ネットワーク

2. 質問2の共起ネットワークの前後比較

質問2は、「クリティカルケア看護とはどんな看護を言うと思いますか？イメージで良いので思い浮かぶだけ書いてみてください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図3、参加後が図4である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「患者」の7回であり、続いて「看護」「重症」の6回、「行う」の5回、「ケア」の4回、「侵襲」「生命の危機」「判断」等が2回であった。「命の危機的状況」「重症」「行う」で構成されたサブグラフ、「判断」「イメージ」「ケア」で構成されたサブグラフ、「侵襲」「大きい」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では、「患者」「看護」が最も多く8回、次に「ケア」「危機」「生命」の4回、「人」「命」等が3回、「家族」が2回であった。「患者」「看護」「家族」「行う」で構成されたサブグラフ、「生命」「危機」「状態」で構成されたサブグラフが存在している。

3. 質問3の共起ネットワークの前後比較

質問3は、「クリティカルケア看護が対象にしている患者さんの範囲（慢性期，周手術期，小児科，がん患者，救急看護など）に入ると思うものをどのような表現でもいいので思いつくだけ書いてみてください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図5，参加後が図6である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「救急」の7回であり、続いて「看護」の6回、「対象」の4回、「ICU」「患者」「急性」の3回、「すべて」「周術期」「小児科」「範囲」等が2回であった。「すべて」「全て」で構成されたサブグラフ、「急性」「救急」「ICU」「小児科」で構成されたサブグラフ、「患者」「対象」「考える」「範囲」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では、「患者」「小児」「対象」が4回、「ケア」「成人」等が3回、「クリティカルケア看護」「疾患」「精神」「年齢」「慢性」等が2回であった。「成人」「小児」「年齢」「疾患」で構成されたサブグラフ、「クリティカルケア看護」「慢性」「患者」「考える」で構成されたサブグラフ、「精神」「ケア」で構成されたサブグラフが存在している。

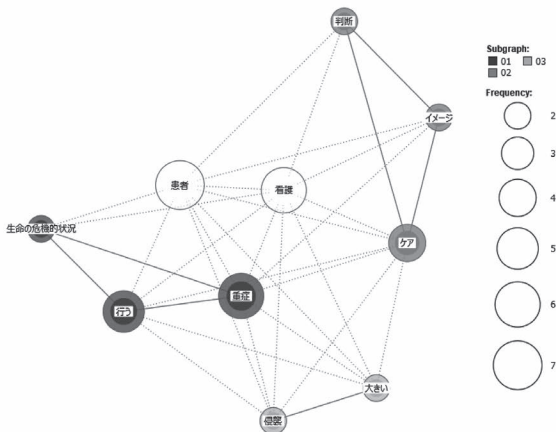


図3 質問2 実習参加前の共起ネットワーク

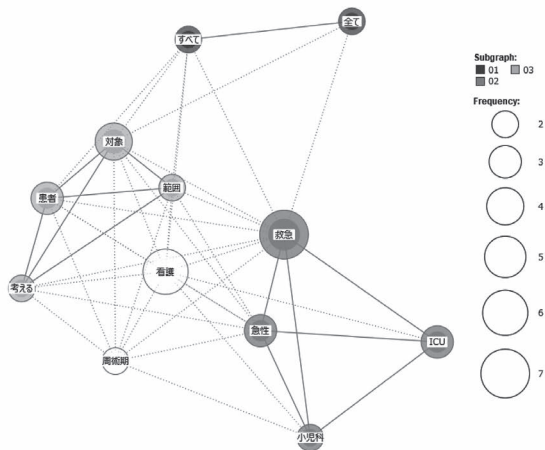


図5 質問3 実習参加前の共起ネットワーク

れたサブグラフ、「救急センター」「救命」「手術室」で構成されたサブグラフが存在している。

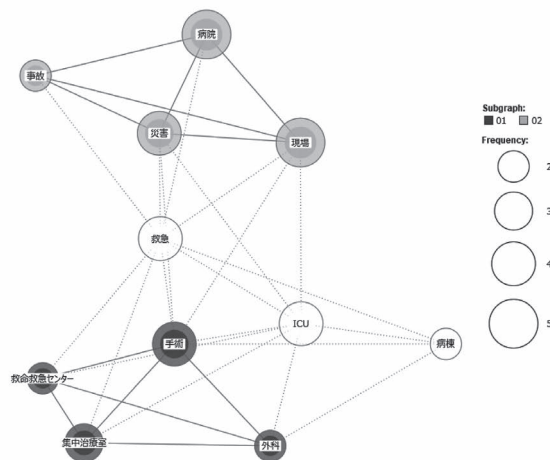


図7 質問4 実習参加前の共起ネットワーク

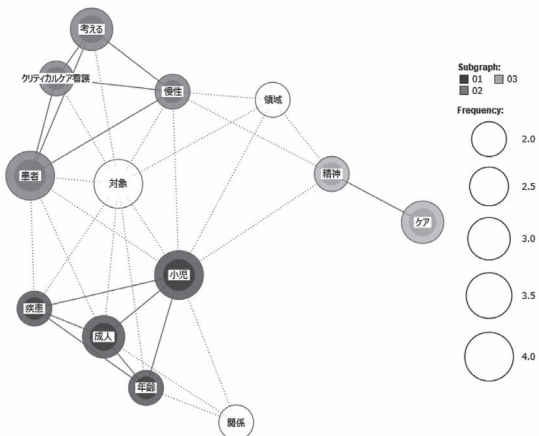


図6 質問3 実習参加後の共起ネットワーク

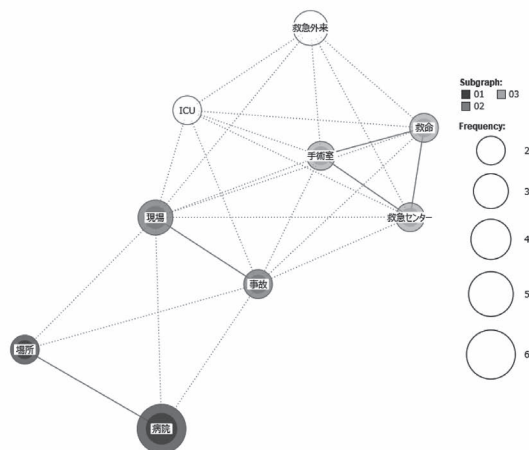


図8 質問4 実習参加後の共起ネットワーク

4. 質問4の共起ネットワークの前後比較

質問4は、「クリティカルケア看護が行われる場所はどこだと思いますか？イメージで良いので思い浮かぶだけ書いてみてください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図7，参加後が図8である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「現場」「病院」の5回であり，続いて「ICU」「救急」「災害」「手術」の4回，「集中治療室」の3回，「外科」「救命救急センター」「事故」「病棟」の2回であった。「救命救急センター」「集中治療室」「外科」「手術」で構成されたサブグラフ，「事故」「災害」「現場」「病院」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では，「病院」が最も多く6回，続いて「救命外来」「現場」の3回，「ICU」「救急センター」「救命」「事故」「手術室」「場所」の2回であった。「病院」「場所」で構成されたサブグラフ，「事故」「現場」で構成さ

5. 質問5の共起ネットワークの前後比較

質問5は，「クリティカルケア看護が目指しているものは何だと思いますか？イメージで良いのでお書きください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図9，参加後が図10である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「患者」の6回であり，続いて「回復」「救う」「状態」「命」の4回，「家族」「看護」「危機」「支える」「支援」「重篤」「迅速」が2回であった。「危機」「状態」で構成されたサブグラフ，「迅速」「看護」「家族」「支援」で構成されたサブグラフ，「命」「救う」で構成されたサブグラフ，「重篤」「考える」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では，「家族」が最も多く10回，「ケア」「家

族」「看護」の4回、「医療」「生命」「命」等が3回、「危機状態」「全人的」が2回であった。「全人的」「ケア」「行う」で構成されたサブグラフが存在している。

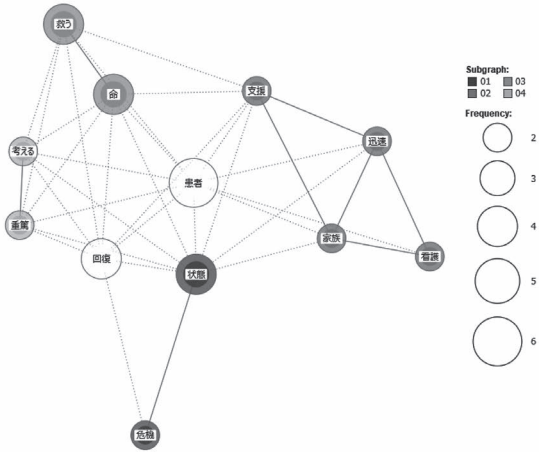


図9 質問5 実習参加前の共起ネットワーク

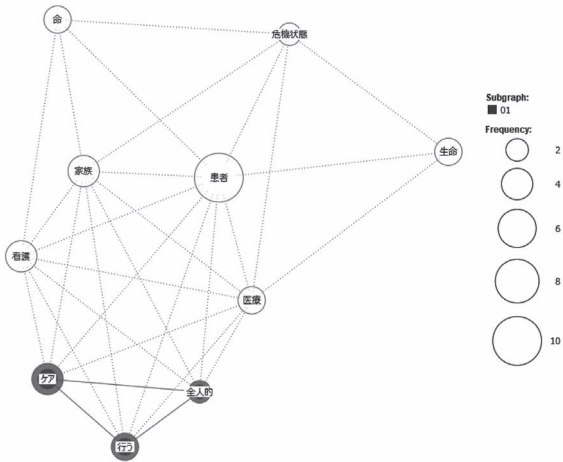


図10 質問5 実習参加後の共起ネットワーク

6. 質問6の共起ネットワークの前後比較

質問6は、「DMAT隊員とはどんな仕事をする看護師だと思いますか？イメージで良いのでお書きください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図11、参加後が図12である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「行う」「災害」の8回であり、次いで「現場」の7回、「場所」の4回、「医療」「患者」「行く」「処置」「派遣」の3回、「いち早い」「事故」「場」が2回であった。「行く」「患者」で構成されたサブグラフ、「場所」「事故」「災害」「場」で構成されたサブグラフ、「現場」「行う」「いち早い」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では、「災害」が最も多く13回、次いで「現場」の12回、「行う」「支援」の7回、「病院」の6回、「搬送」の5回、「看護師」の4回、「ケア」「医療」「患者」「処置」「状況」「被災」「本部」が3回、「活動」「看護」「管理」「行く」「傷病」「情報」「人」「避難」等が2回であった。「処置」「行く」で構成されたサブグラフ、「状況」「人」「患者」「ケア」で構成されたサブグラフ、「災害」「現場」「搬送」「病院」「看護」「行う」で構成されたサブグラフ、「看護師」「支援」「活動」「被災」「本部」「考える」で構成されたサブグラフが存在している。

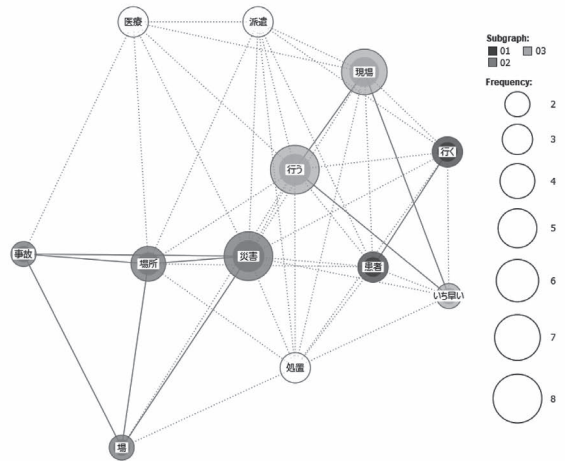


図11 質問6 実習参加前の共起ネットワーク

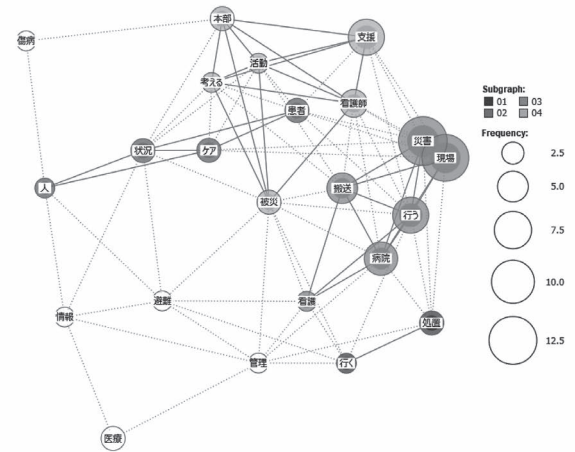


図12 質問6 実習参加後の共起ネットワーク

7. 質問7の共起ネットワークの前後比較

質問7は、「フライトナースとはどんな仕事をする看護師だと思いますか？イメージで良いのでお書きください」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図13、参加後が図14である。実習参加前に出現回数が最も

多い語は「現場」の9回であり、「行う」の7回、続いて「ドクターヘリ」の6回、「医師」「患者」「救急」「行く」「災害」「乗る」の5回、「救命」の4回、「いち早い」「活動」「処置」の3回、「事故」「出動」「病院」の2回であった。「災害」「現場」「医師」「事故」で構成されたサブグラフ、「救急」「いち早い」で構成されたサブグラフ、「処置」「患者」「行う」で構成されたサブグラフ、「ドクターヘリ」「救命」「乗る」「活動」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では、「患者」が最も多く8回、「行う」の6回、「医師」「現場」「処置」「病院」の5回、「救急」「乗る」「搬送」の4回、「ヘリコプター」「医療」「必要」の3回、「ケア」「看護」「ドクターヘリ」「向かう」「行く」「治療」「出動」「消防」「情報」「要請」「連携」等が2回であった。「ドクターヘリ」「救急」「病院」「乗る」「行く」で構成されたサブグラフ、「搬送」「現場」「向かう」で構成されたサブグラフ、「処置」「情報」「医師」

「連携」で構成されたサブグラフ、「治療」「ケア」「必要」「消防」「要請」「出動」で構成されたサブグラフが存在している。

8. 質問8の共起ネットワークの前後比較

質問8は、「夢で良いので、将来看護師としてどこで働きたいですか？（ICU、CCU、フライトナースなど具体的に）」という内容である。実習参加前の共起ネットワークは図15、参加後が図16である。実習参加前に出現回数が最も多い語は「手術」の6回であり、続いて「外科」「経験」の4回、「ICU」「救急」「病棟」等の3回、「救命」の2回であった。「救急」「救命」「看護」「経験」で構成されたサブグラフ、「外科」「ICU」「病棟」で構成されたサブグラフが存在している。

実習参加後では、「看護師」が最も多く6回、「働く」の4回、「救急外来」の3回、「ICU」「救急」「手術」「将来」等が2回であった。「将来」「救急」「看護師」で構成

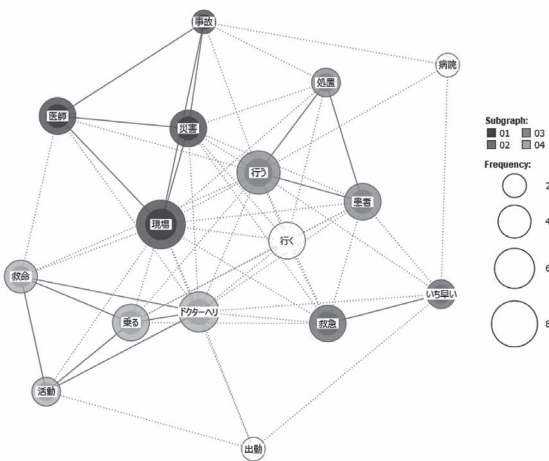


図13 質問7 実習参加前の共起ネットワーク

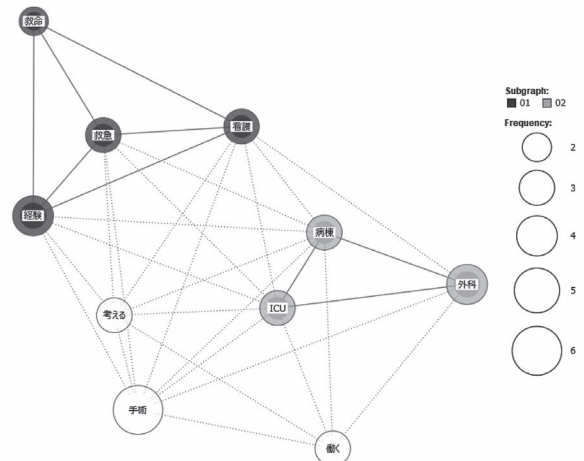


図15 質問8 実習参加前の共起ネットワーク

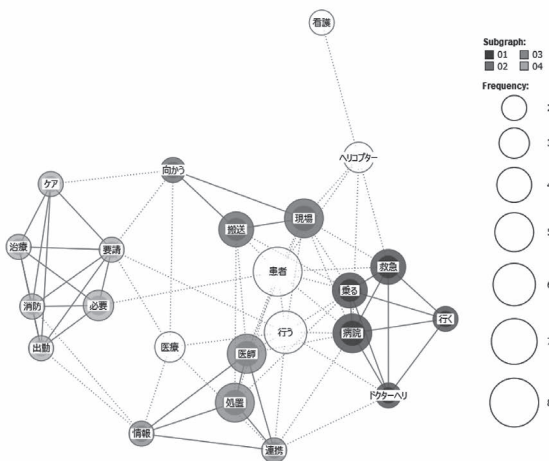


図14 質問7 実習参加後の共起ネットワーク

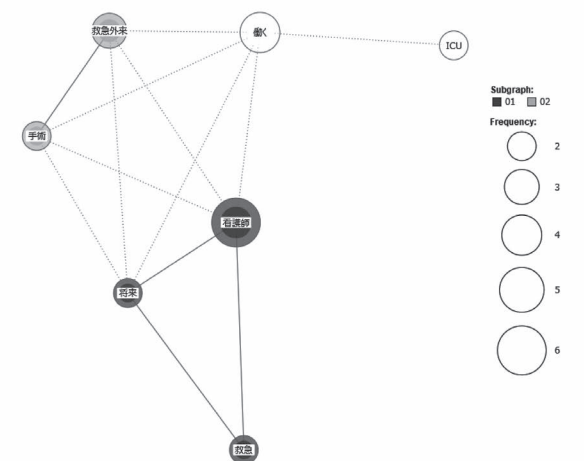


図16 質問8 実習参加後の共起ネットワーク

されたサブグラフ、「救急外来」「手術」で構成されたサブグラフが存在している。

IV. 考 察

1. 臨地実習参加前後の学生の知識の比較

本調査では、A大学の4年次生が統合実習、成人看護学急性期領域の臨時実習に参加する前と後で同一のアンケート調査を実施していることから、種々の結果を比較することができる。まず、臨地実習以外の、いわゆる座学の授業でクリティカルケア看護の知識がどの程度学生に身についていたのかを考察する。

本調査が対象とした学生は、対象が通う大学にクリティカルケア看護という科目名で開講されている授業がないため、4年次生の統合実習に参加するまでにクリティカルケア看護という科目名の授業を履修していない学生である。しかし関連する急性期看護論の授業の中で、「クリティカルケア看護とは」等の概念は説明されていた。具体的には、アメリカクリティカルケア看護師協会が謳っているクリティカルケア看護の定義、我が国においてクリティカルケア看護の考えが導入された経緯、種々の団体やテキストが唱えるクリティカルケア看護とは何かについて、クリティカルケア看護が対象とする患者や病期、患者の発達段階、場所、加えて患者の家族や重要他者も看護の対象であることや、身体的な看護のみならず精神的な看護の重要性等が授業の中で取り扱われていた。

質問2では、クリティカルケア看護とはどんな看護を言うのか問うている。結果から臨地実習に参加する前の学生はクリティカルケア看護を命の危険があるほど重症で、外傷などの身体への侵襲が大きい対象を扱う看護であるというイメージを持っていることがわかる(図3)。実習後の結果では、クリティカルケア看護のイメージの中に「家族」が入っている(図4)。臨地実習に参加したことによって、実際に救急搬送された患者の家族への対応を目の当たりにしてきたことによるものであると考えられる。「家族」はクリティカルケア看護が重きを置く対象であると言われている⁷⁾。実習によってクリティカルケア看護が対象とする人々の範囲を広げることができ、クリティカルケア看護で大切にすべきものへの認識が深まったと言える。

質問3では、クリティカルケア看護が対象としている患者の範囲を問うているが「すべて」としている一方で、「救急」、「急性」、「ICU」、「小児科」が共起しており、授業や3年次生までの実習で経験したことがある内容を表現する語が強く結びついていることがわかる(図5)。実習後の結果では、初めて「クリティカルケア看護」という言葉が出てきており、加えて「精神」と「ケア」も結びついている(図6)。臨地実習に参加する前は「急性」や「救急」、「ICU」といった一般的に急性期といわ

れる範囲の語が共起していたが、実習に参加した後では、慢性期患者、小児、成人など年齢や病期、疾患に関わらずクリティカルケア看護は対象としているということを知った学生は理解したと考えられる。また、クリティカルケア看護では生命を救うことに注力しがちであるが、臨地実習に参加したことで精神的なケアの重要性を学ぶことができたと考えられる。

質問4では、クリティカルケア看護が行われる場所について問うている。実習に参加する前からクリティカルケア看護では病院以外の場所も対象となると理解していること、加えて医療施設内でクリティカルケア看護が実践される場所は、一般病棟ではなく特殊な病棟であると理解していることがわかる(図7)。図7と図8を比較してみると臨地実習に参加する前後で大きな違いはなく、クリティカルケア看護が行われる場所に対する理解は、臨地実習の参加前後で変化がなかったと解釈することができる。

質問5では、クリティカルケア看護が目指すものは何であるかと思うかと質問している。実習に参加する前には重篤な患者でも命を救うこと、迅速な看護で患者以外の家族の支援も行うことを目指すのがクリティカルケア看護であると思っていることがわかる(図9)。実習に参加した後の回答では、「全人的」、「ケア」、「行う」の3つの語が共起しているのみで、他のサブグラフは検出されていない(図10)。臨地実習に参加することによって、クリティカルケア看護が目指すものは何かを焦点化することができるようになったのではないかと考える。

以上のことから、実施したアンケート調査の質問2～5を実習に参加する前後で比較すると変化が表れていた。実習に参加する前に実施したアンケート結果から、学生は「クリティカルケア看護」という名称で開講されている科目がなくても、他の関連する授業の中で説明された、クリティカルケア看護とは何かを把握できていると判断できる。しかしながら実習参加後の回答を見ると、学生は講義からのみ獲得していたクリティカルケア看護の知識に加えて、本来クリティカルケア看護が追いつけてきた看護を体得することができたのではないかと考える。各自が実施した事前学習が理解を深めたということもできるが、実習に参加することによってさまざまな社会的背景を持つ患者や、患者の家族をリアルに体験してきたことによるものではないかと考えることもできよう。これは、井上智子氏が述べたクリティカルケア看護の定義である「あらゆる治療・療養の場、あらゆる病期・病態にある人々に生じた、急激な生命の危機状態に対して、専門性の高い看護ケアを提供することで、生命と生活の質(QOL)の向上を目指す」⁸⁾に適うものではないかと考える。

2. 有資格者・経験者からの講義がもたらす効果

クリティカルケア看護が実践される場所は医療施設のみならず、事故現場や災害発生現場などのプレホスピタルケアまでが含まれる。医療施設以外の場所に赴いてクリティカルケア看護を実践する看護師としてフライトナースやDMAT隊員が挙げられる。しかしながら学生には事故現場や災害発生現場での実習はかなわないため、フライトナース・DMAT隊員として活躍している方から実際にあった話を聞くことでクリティカルケア看護への学びを深めることを目的に両者の講義が実習に含まれている。

質問6と質問7は、具体的に専門性の強いDMAT隊員とフライトナースについて、どのような仕事であると考えているかを問う内容となっている。質問6、質問7は講義を受ける前後でアンケートの回答が顕著に変化していることがわかる(図11, 図12, 図13, 図14)。DMAT隊員の仕事について、講義を聞く前は災害や事故の現場に赴いて活躍する仕事と捉えていると考えることができる。しかし講義を受けた後は、「本部」、「支援」、「活動」、「看護師」、「被災」が結びついてきており、講義を受ける前にはなかった災害対策本部での活動が仕事の内容であることを理解できたことがわかる。

フライトナースの仕事について図13を見ると、学生は講義を受ける前に、フライトナースとはドクターヘリに乗って救命活動をする職業であるという知識を持っていたが、図14を見ると、講義を受けた後ではそれがより具体的な内容となっていることがわかる。講義を受ける前にはなかった「要請」、「消防」、「出動」、「治療」、「必要」、「ケア」が共起し、また「向かう」、「搬送」、「現場」が共起しサブグラフとして検出されている。フライトナースは要請によって出動することや、消防と連携してランデブーポイントまでヘリコプターで患者を搬送することを理解したと考えられる⁹⁾。また、患者のもとへ行く際に他の職種との連携の重要さだけでなく、情報を収集したり、あるいは情報を共有したりすることがフライトナースの仕事には欠かせないということが理解できたのだと考える。

質問6、質問7から、学生はDMAT隊員の仕事内容、フライトナースの仕事内容がより明確に理解できるようになったと考えられるが、さらにこれらの職業の範囲を単に患者の処置や搬送だけにとどまらず、多職種と協働する大きなシステムの中の一部としての仕事であることを説明できるようになったことは、有資格者であり経験者である者からの事例を交えた臨場感のある講義によるものであり、学生に強く印象付けたのではないかと考えられる。統合実習の一部として、臨地実習ではないが、実際に活躍するDMAT隊員やフライトナースから講義を受けることは、教科書を使った講義だけでは味わうことができない実際の声を聴くことができる。また事例も実際のものである。看護系大学における看護に関する授業

は、看護師資格を持ち看護の経験者が授業を担当している。同様にDMAT隊員、フライトナースに関する授業であれば、経験者が授業を担当することは特別なことではなく、むしろ当然のことであるといえるのではないだろうか。授業の受け手である学生も、現役のDMAT隊員やフライトナースからの臨場感のある講義は、印象に残りやすい。本研究の目的は実習に参加する前後での学生の知識を把握することにあるが、質問6、質問7の結果からクリティカルケア看護を代表するこの二つの職業の経験者を統合実習に組み込むことは、学生の学習に効果があるということもできる。

3. 学生の興味や将来像への影響

本研究の目的である、クリティカルケア看護の臨地実習に参加した前後での学生の知識の把握することによって、学生の興味や将来像にどのような影響が生じたのかを考察する。仮に学生が実習に参加する前に描いていたクリティカルケア看護と実際に実習で体験したクリティカルケア看護が違うと感じた場合、将来進む方向を変えることも考えられる。

質問1と質問8は統合実習ではなぜ成人看護学急性期領域を選択したのか、将来看護師としてどこで働きたいかを質問している。自身のことについての質問であるため、臨地実習に参加した前後で比較してもあまり変化はないのかと思っていたが、使う語などに変化が見られた。

質問1の臨地実習参加前の調査では、「病棟」と「就職」が共起しているが、実習参加後には「病棟」という語は検出されていない(図1, 図2)。また実習前には「興味」と「救急」が結びついていたが、実習後には「興味」と「急性」が結びつくようになっている。これは、DMAT隊員やフライトナースの講義を受けたことや、救命救急センターへの臨地実習から患者のみならず家族への支援をしていることなどを学ぶことができた結果、「救急」の施設だけではなく他の「急性」状態の患者を含む看護に興味があって統合実習で成人看護学急性期領域を選択したことを認識したのではないかと考える。

質問8では、将来自分が働く場所をイメージしてもらっている。図15と図16を比較すると臨地実習を経験したことにより、自分の将来像をより焦点を絞った言葉とすることができるようになったと理解できる。以上のことは、先に述べたように実習に参加する前にもクリティカルケア看護とは何かを把握できていたこと、および実習に参加することがよりクリティカルケア看護への知識や理解を深めると言うことの傍証になると考える。しかしながら、もともとクリティカルケア看護に興味を持っていたり、将来は救命救急センターで働きたいと考えている学生が対象の調査であるため、今後は他の看護領域に興味がある学生にも調査をする必要があるだろう。

V. 結 言

本研究では、クリティカルケア看護の実習に参加する前後の学生の知識を把握することを目的に調査を実施した。クリティカルケア看護の臨地実習を通じて、学生は座学で得た知識に加えてクリティカルケア看護とは何か、クリティカルケア看護が目指すもの、クリティカルケア看護の対象について体得することができたと考える。この結果はクリティカルケア看護の基礎看護教育への導入の仕方や教育内容を検討する際の基礎資料となりうるものである。A大学の臨地実習は見学だけでなく学生が主体的に実践に参加する実習であった。よって、学部でのクリティカルケア看護の臨地実習では、できる限り患者に触れ、ケアすることを取り入れる実習とすることで学生の学びを深めることになるということができる。加えて、DMAT隊員やフライトナースなどの専門職の講義では、有資格者で経験のある者が担当することで学生はより詳細な知識を身に着けることができるとことが示唆された。

文 献

- 1) Munro C, AACN's 50th Anniversary : Building on Our Past to Ensure a Bright Future, AMERICAN JOURNAL OF CRITICAL CARE (California) 2019 ; 28 (3) : 166-168.
- 2) 一般社団法人日本看護系大学協議会. 2022年度版 高度実践看護師教育課程基準高度実践看護師教育課程審査要項.
- 3) 山勢博彰. 系統看護学講座別巻 クリティカルケア看護学. 第2版. 東京：医学書院；2020. p.2-9.
- 4) 寺町優子. 日本におけるクリティカルケア看護の歴史と現在. 日本クリティカルケア看護学会誌 2005 ; 1 (1) : 7-13.
- 5) 井上智子. 蓄積から挑戦へ. 日本クリティカルケア看護学会誌 2005 ; 1 (1) : 15-19.
- 6) 山勢博彰. 系統看護学講座別巻 クリティカルケア看護学. 第2版. 東京：医学書院；2020. p.2-9.
- 7) 医学書院 [internet]. 医学会新聞「高まるニーズに応えるクリティカルケア看護を」山勢博彰 (第2708号 2006年11月20日). https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/old/old_article/n2006dir/n2708dir/n2708_02.htm [accessed 2022-11-07]
- 8) 井上智子. 蓄積から挑戦へ. 日本クリティカルケア看護学会誌 2005 ; 1 (1) : 15-19.
- 9) 勝見 敦. 小原真理子. 災害救護－災害サイクルから考える看護実践－. 初版. 東京：ヌーヴェルヒロカワ；2012. p.250-264.